★（書評）官僚制と闘う３つの方法それぞれの限界を指摘＝大西広
----書評：王力雄著『セレモニー』藤原書店、2019 年----

私も中国の少数民族問題を研究しているので反体制作家として有名な王力雄の『私の西域、君の東トルキスタン』は読んでいたが、ここコロナ問題での「監視国家」問題が浮上するに及び、この本を初めて読んだ。最初のうちは「エロ小説」ぶりに驚き、慌てて中国の「エロ出版物に関する規定」を院生に調べてもらった。それによると「卑猥な性行為、セックスとその心理活動を書くこと」は禁止ということなので、これでは政治的な内容の当否に限らず発禁となる。これを分かった上で著者はセックスのリアルな表現を書き込んだのではないだろうか。ただし、好意的に言えば、「人間とは物欲、権力欲、色欲でうごくもの」という本書の主張をリアルに書き込むには、三番目のセックス描写も必要だったということになる。

ただし、このことを除くと、話の展開はダイナミックで速く、ぐんぐん読者をひきつける。そして、官僚、商人、科学技術者といった人物の中でも最も学ばせられるのは官僚=役人の行動様式である。このリアルさが本書のキモで、それがまさしく国家に不要なキャンペーンを発動させ、国家主席を暗殺させ、最後には「民主化」をも実現させてしまう。毛沢東は「統制すべきは官僚」としたが、それが何故なのかをよく理解させてくれる。

そのため、こうした「官僚の統制」として書かれている内容を本書から読み取ると３つの内容があることとなる。①下部組織の権益保持と闘う官僚をサポートするための中央直結組織(党にも似た役割がある)、②「中央」が官僚機構と闘う手段としてのハイテク情報収集組織、③大衆に依拠した毛沢東的な「大民主」である。著者は結局のところ、①や②の危うさを主張するとともに、「民主化」の際に官僚機構の抵抗への打撃となった③にも否定的である。それが結局のところ文化大革命と同様、国家分裂ややくざの横行など世の中の混乱をきたすと主張しているのは、結局、役人が自己保身の目的でしか「民主化」を実現しないから、つまりイニシアはあくまで官僚の側のものと考えているからのように思われる。私自身は、「マオイスト」なので、もっと素直に③を民衆のエネルギーと捉えているが、である。ちなみに、著者の最終的な主張は「権力がハイテクを使うなら、民主主義も対抗して使うべき」となっている。新しい技術を手にできるものは勝利し、できなければ勝利できない、という結局はかなり単純な主張となっている(「あとがき」より)。確かに中国では腐敗官僚の摘発に大衆のネット上での写真解析などが大きな威力を発揮しており、また本書を評した梶谷懐は②を「対官僚」の監視であるという意味で積極評価している(梶谷・高口『幸福な監視国家・中国』NHK 出版新書、2019 年)。著者

の「民主主義のハイテク利用」は台湾で出版された2冊の書籍によって「インターネット共和国」として示されているらしい。入手して検討してみたい。

ただし、こうした「独裁批判」をつらつらと読みつつ、ふと私の本来の「経済学」に戻った時、私が現代中国の本当の支配者とするところの「独占資本」の問題が一切論じられていないことに気が付く。政治が良いか悪いかはそのそれぞれの社会における真の支配者と闘えているかどうかによって判断されるべきで、その政治的リーダーが「独裁的」かそうでないかは経済学では重要な問題ではない。「土台」における支配階級と被支配階級の関係にどう政治が関わっているかが焦点となる。「官僚」自体はある種の階級、それも支配階級をなしているので、その「打倒」は重要であるが、ともかく本書で言う「主席」と「官僚」と「庶民」という構図だけでは抜け落ちる、経済社会における真の支配者の特定が何よりも重要である。ので、本書の最終的な評価はこの「問題設定の是非」にまで遡らないとできないと思った。

参考にされたい。

（以上）